
山梨大学教育学部附属教育実践総合センター センターだより第216号(通巻第283号)

2025 年 3 月 24 日 発行
山梨大学教育学部
附属教育実践総合センター
TEL 055-220-8325、FAX 055-220-8790
E-mail: edjissen-as@yamanashi.ac.jp
URL: <https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/>

※このセンターだよりで紹介した研究会、研修、教育フォーラムに関するお知らせは、改変しない限り、自由に複写、配布していただいて結構です。

*****コンテンツ一覧*****

- 第45回教育フォーラム開催報告
ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現ーこれからの授業の在り方を考える
- 令和6年度「前期実習前教師力養成講座」の報告
- 令和6年度 第2回不登校の子どもを支える保護者のための情報交換会
- 第2回やまなし情報教育推進室フォーラム開催報告
- 「地域学習アシスト事業」の令和6年度の活動の概要について報告
- 令和6年度制作オンライン研修動画（高校編）について報告
- 東金町小学校 ICT支援学生引率参加報告書
- ICT支援学生の研修と派遣の報告
- 第106回国立大学教育実践研究関連センター協議会・総会 参加報告書
- やまなし情報教育推進室先進地域視察報告書（京丹波町立和知小学校）
- 教育ボランティアニュース No.6
- 4・5月の主な行事予定

これまでのセンターだよりの一部は、<https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/2306/> で見ることができます

第45回 教育フォーラム開催報告

ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現 ーこれからの授業の在り方を考える

令和7年1月30日午後6時から、教育学部A会議室に於いて、第45回教育フォーラムを対面とZOOMによるオンラインのハイブリッドで開催しました。

これからの時代を生きる児童生徒の資質・能力を育成するためには、どのような授業が求められるのでしょうか。教師は、これまで知識を伝える授業が多く、伝えることを自分の存在価値のように思いがちですが、これからの授業をデザインするにはその指導観を変える必要があります。

これまでの教室で見られた教師が子供を教えるような授業だけでは、これからの社会を生き抜くための資質・能力を育成することができません。

そこで、学びのプロセスをどのように考え進めたら良いのか、学びたいという子供の意欲をどのように喚起すればよいのか等を検討し、これからの授業の在り方をフォーラム参加の皆さんと考えました。



当日は、小学校32名、中学校16名、高等学校8名、大学・教職大学院教員等3名、教育行政18名、一般5名の計82名の参加があり、内18名は対面での参加でした。

プログラム

【コーディネータ】 稲垣 俊介 氏（山梨大学教育学部附属教育実践総合センター 准教授）

・【実践発表】

ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて

ーTry & Reflectionで学びを創造しようー

小澤 祐太郎 氏（北杜市立明野小学校 教諭）

ーこれからの授業の在り方を考えるー

荻原 佐知 氏（甲州市立塩山中学校 教諭）

・【鼎談】

登壇者によるディスカッション

・【講演】

「デジタル学習基盤におけるこれからの教育の在り方を考える」

三井 一希 氏（山梨大学教育学部附属教育実践総合センター 准教授）

＜実践発表1＞

小澤祐太郎先生の実践発表

ICTを活用した個別学習と協働学習の実現を目指す取り組みについて発表していただきました。

はじめに学習者主体の学びに慣れさせていくしかけとして、低学年からタイピング練習等を取り入れ、ICT環境への慣れを促進。また、朝の学習や授業での対話を

通じ、他者とのコミュニケーションによる学びを深化させている取り組みを紹介していただきました。さらに、自己選択・決定の場面を設定し、児童が自律的に学ぶ姿勢を育てていくプロセスを通じて、子どもたちは自分の選択に責任を持ち、目的意識を形成し始めたとのことでした。

また、目的意識・時間意識・相手意識を持たせていくために、授業や単元の目標と流れを明示し、学習者に見通しを持たせる工夫が紹介されました。具体的には、カウントアップタイマーの導入や学習目標の先出しにより、学習の自己調整力を向上させる取り組みを紹介。これにより児童は自分のペースで学びを進めやすくなり、教師のフォローも効率的に行えるようになったとのことでした。

更に授業進行の透明性を高めるため、進捗状況を示すエクセルシートや学習コンテンツへのリンクを作成。これにより児童は自分の進捗状況を把握しながら、各自の学習を進めることができる環境を整備しているとのことでした。アンケート結果からは、子どもたちが自分のペースで学べることに意欲を示していることが明らかになっていることを示されました。

また、協働的な学びの促進を図るため、物語文の学習では中心人物の感情を共同編集し、気づきを深める機会を提供。こうした取り組みの中で、児童同士が自然と対話を始め、学びを深化させる姿を報告していただきました。

「Try & Reflection」の姿勢を大切にし、学習者主体の教育を実現するための持続的な更新と改善の姿勢が印象的なプレゼンテーションでした。

＜発表者への質問1＞

ここで**稲垣俊介准教授**からの突っ込み質問で、内容を深掘りしていきました。「個人作業とグループ作業のバランスを取るための具体的な工夫」について小澤先生は、時間内に条件を示しつつ、子どもたちが自分で取り組む経験を重視することが大切だと述べました。具体例として、国語の授業で四枚の絵を使って物語文を作る活動を紹介し、ループリックを示し、目標を自覚させることで、子どもたちが自発的に話し合いを始めたことを挙げました。緩やかな学習規律の中で子どもたちが自分から学びを深める姿勢を育てていきたいと話されました。



＜実践発表2＞

荻原佐知先生の実践発表

はじめに塩山中学校全体で取り組んでいることについてお話しされました。学校全体で従来の「教師が板書し、生徒がそれを写す」授業スタイルからの脱却を目指し、単元計画や授業の流れをあらかじめ共有する取り組みを始めたとのことでした。これにより、生徒が単元全体や一時

②授業観の変容のきっかけ

「とにかくやってみた」結果・・・

- ・教科書ベースなので、間違いは少ない。
- ・それぞれのペースで学んでいる姿。
- ・それぞれ違う「分からない」に対応。

→これなら「やっていける」かもしれない！

原因 同じ選挙で選挙区ごと有権者数や人口数が異なること。

結果 ・有権者の権利が不平等になる
・少数意見が実際よりも強く見える

・地方に若者が少ないため、高齢者の票が強くなる
・簡単に当選できる立候補者とそうでない立候補者が出てきて意見を届けることが難しくなる。

間の授業の見通しを持ち、自分なりのペースで学習を進められる環境が整えられたとのことでした。また、生徒に学び方を選択させる時間を増やし、一人で考えたりグループで協働したりと多様な学習スタイルも推進されています。こうした取り組みにより、生徒主体の学びが徐々に実現していると話されました。また、荻原先生はICTの利点を活かすための具体策も紹介されました。例えば、生徒の学習進捗や振り返りをスプレッドシートで共有し、仲間同士が互いの学びを参考にできる仕組みを整備。さらに、文字数カウント機能によるアウトプット量増加を促す仕組み、クラウド上での振り返り作業を教師が確認しやすくする工夫も述べられました。

荻原先生自身の授業観についても変化があったと語られました。今では授業の全体像を事前に示し、情報収集から整理・分析、まとめまでの流れが定着することで「いつもの通り」で伝わるようになっていたとのことでした。生徒から「前のやり方のほうがよかった」という声もあったが、自分で学びを進める今の方が、「勉強している感じがする」との感想があったことも報告されました。「説明をしないと不安だったのは私自身だったんだ」という言葉がとても印象的でした。授業の流れ、授業の形態等に工夫を重ねた結果、生徒が主体的に疑問を解決しようとする姿勢が現れ、他者の意見を参考にしながら自分の考えを構築する姿が見られるようになってきたとのことでした。

最後に、少しずつ、できるところから変えていき、生徒の変化も楽しみながら今後も進めて行きたいという思いを語られました。これからICTを活用していこうとする先生方にとって、参考になる取り組みが示されていると同時に、とても勇気づけられる発表でした。

＜発表者への質問2＞

ここで再び司会をされている**稲垣 准教授**から突っ込み質問があり、内容を深掘りしました。「自ら学びを進めることへの抵抗感のある子ども達へのアプローチ」と、「従来の指導法からの転換への教師の葛藤」についてでした。荻原先生は、生徒が自分で理解することの難しさを感じながらも、それを乗り越えるために友達や先生に聞きに行くことで「なるほど」という気づきを得ることができ、それが学びのモチベーションになっているのではないかと説明されました。また、教師自身も教えずにいいのかという葛藤があったが、教科書ベースであれば間違いが少ないことに気づき、課題の設定やポイントの説明を工夫することで、生徒自身が「わかった」という気持ちを持つことを大切にしていこうと思うようになったと述べられました。

鼎談〈ディスカッション〉

お二人の発表を受け、「ICTの活用による子どもたちの意外な変化」、「今後の教育における未来への展望」について、**三井一希 准教授**を交えてディスカッションを行いました。画面上でスライドを共有し、それぞれに記述してもらった方法でディスカッションを進めました。記述する間には、このような方法をとることでリアルタイムに書いている内容を把握できたり、コメントをしたりすることもできるなどの利点について、お二人の准教授の話がありました。

「ICTの活用による子どもたちの意外な変化」について、小澤先生は1人1台端末の導入がされたことでプログラミングやタイピングを競い合う子どもたちが増え、中にはゲームを作って他の学年に紹介する子も出てきたことを挙げました。また、振り返りをICTで行うことで、手書きでは書けなかった量の文章を打てるようになり、ノートでの記述力も向上したと述べました。

荻原先生は、板書を写真に撮ってクラスルームやチャットに上げる生徒が増えたことや、自分たちで反省シートを作成し、意見交換をする生徒もいることを紹介しました。また、クラスや学年の連絡を自分たちで上手に行い、共有したいことを伝える生徒が増えたと述べました。

生徒同士のやり取りと教師の把握については、心配するところもありますが、クラスルームやチャットでのやり取りは教師がいつでも確認できるため、今のところ心配はないと説明しました。ただし、パソコン使用上のトラブルには個別に対応していると述べました。

「1人1台端末」は、どんな未来を描いてくれそう？

●小澤 祐太郎（北杜市立明野小学校 教諭）

- ・学習者デジタル教科書が端末に標準整備されていくともっと学習が進む？
- ・進捗シートを作るのはかなりの時間がかかる→学習内容に応じて自動生成してくれるとうれしい

●荻原 佐知（甲州市立塩山中学校 教諭）

正直、今のことでいっぱい입니다。今の授業に関連すると、「自分で分かりやすく編集できる」力をつけさせたい。クラスの中だけでなく、もっと広い範囲でやりとりができるといいな。AIをもっと上手に活用。

2つ目の「1人1台端末は、どんな未来を描いてくれそう？」について、荻原先生は、正直、今のことでいっぱいです。今の授業に関連すると、「自分で分かりやすく編集できる」力をつけさせたい。クラスの中だけでなく、もっと広い範囲でやりとりができるといいな。AIをもっと上手に活用。また、クラスや学校を超えて広い範囲で

のやり取りができるようにしたいと述べ、AIをもっと上手に活用できるようになるとどうなるんだろうと考えられています。小澤先生は端末に全てが標準整備されることでより学習が進み、スムーズに活用できるようになることを期待しています。また、進捗シート等の自動生成が可能になることで、準備の省力化が図れることを期待していると述べました。

三井先生は、1人1台端末が当たり前になり、インターネットにいつでもつながる環境が整うことで、学びやすさにつながってほしい。地方の格差が解消され、日本全国どこにいても同じような学びが受けられるようになると嬉しいと述べました。

〈講演〉

山梨大学教育学部附属教育実践総合センター 三井一希 准教授

「デジタル学習基盤におけるこれからの教育の在り方を考える」をテーマにご講演をしていただきました。ご講演内容を要約してお伝えします。詳細なニュアンス等につきましては、ご著書等をご覧くださいと思います。



まず、ネットワークでつながるということについては、インターネットだけでなくクラウドでつながることで、教師の見取り、子ども同士の協働、途中参照等のメリットを享受することができる点を生かして学びを進めることが大切です。GIGAスクールによって児童生徒のアウトプット量が大幅に増加していることに注目すると、デジタルツールの活用により長文入力が容易になり、結果として「量」が「質」に転じる学びの可能性が広がっています。このような環境を整備し、タイピングのスキル向上と自分で考えることの両方にブレーキをかけないようにすることで学習の質が高まっていくようになると思います。

全国学力・学習状況調査のICT機器活用の効力感を見ると、約9割の児童生徒が分からないことがあった時にすぐに調べられると答えている。このような子どもたちの声を踏まえて、授業を作っていくことが必要です。これからの予測困難で変化の激しい時代を生きる子どもたちには、世の中を力強く生きていく力―特に生涯に渡って学び続ける力―がとても大事だと思っています。学習内容などのコンテンツはもちろん必要だが、必要な知識のすべてをあらかじめ学んでおくことは難しい。その都度生じる学習ニーズに基づき必要なときに必要なことを学べるよう、子どもたちに自ら学ぶ学び方を身につけさせることが求められています。その学び方の1つとしてインターネット、1人1台端末が欠かせないのです。

現在求められている「主体的・対話的で深い学び」、「個別最適な学びと協働的な学び」が、ICTがあることで実現しやすくなる一方、ICTがあるからこそ実現できることがあります。ICTがあるからできることを生かしていくことで、学ぶスキル・意欲の向上が図られ、Society 5.0時代を生き抜く力を身につけることにつながっていくと考えています。

これからの教育においては、生徒たちが自己調整や自己決定を行いながら学びを進めるプロセスが重要です。そのためには、児童生徒が模倣から自立的な学びへと移行していくための支援が不可欠です。これらの取り組みを日々の教育活動の中で積み重ねることで、児童生徒は自らの力で学びを進める術を身につけることができる。と講義の前半を締めくくられました。

〈ディスカッションタイム〉教員の介入と環境設計

司会の稲垣先生から「児童生徒の自己調整力を育むために、教員はどのように介入し、環境設計をすべきか」という問いが投げかけられました。

三井先生は、児童それぞれの状況を見取り、それぞれに適切な支援、声かけを行うことを意識することが大事です。一方で、30人のクラスでは、児童ごとに異なる対応をすることは難しい。ICTを活用し効率的に進めたり、他の教師が作成したデジタルデータを使ったりして、児童生徒が自分で学びを進められる環境を構築することで、自らのペースで学びを深めていくことができるようになると思います、と述べています。

～ここからは再び講演の後半、具体的な話になります～

個別最適な学びの子どもたちの現状を教師が把握したり、子どもたちの思いや今後の取り組みを考えたりする際に、学習課題・学習過程・形態などを選択肢できるスケールを用いることで、児童生徒が自己調整を実践しやすい仕組みが構築できます。

～自己調整力を伸ばす取り組みとして、英語の単語練習でのメタ認知を働かせる仕掛け、ICTを使い答えの確認のタイミングを調整している例、学びのレベル・コースを選択しながら修得する例、小学校での自分の学びをふり返る取り組み、クラウドでつながるクラウド上の道具箱、教師のチェック・問い返して学びを深める働きかけなどを紹介されました。～

学び方の価値や意義を伝える、教師が介入し新たな視点や気づきを与えることも必要ではないかと思います。また、安心して、じっくり、深めたいなどの目標を達成するために誰と学ぶのが良いのか、意図を持った形態の選択ができるようになる必要があると思います。

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けて、授業視察を通じて見えてきた共通項があります。右の表のような取り組みを進め、子どもたちの学びを支えるために何ができるかを考えていくことで個別最適な学びに近づいていくことになると思います。

〈ディスカッションタイム〉

ここで稲垣先生が、子どもたちの自己調整できるような学びを促すために、「介入する場合の教師の役割」について質問しました。

これに対して三井先生は、支援するための教師の役割について、荻原先生の「説明しないと不安だったのは私自身だった」とおっしゃったように考えを転換することが必要です。児童がまだ学び方を知らない段階では、教師が主導して進め、皆で取り組む場面を設ける、そこから必要に応じて「足場」を段階的に外していくプロセスが考えられます。このような支援を通じて、児童は次第に自分自身で学びを進める力を身につけていくのだと思います。

さらに、教える時間が減るのであれば、子どもたち一人一人が見えるようになるのではないかと、そこから何をしていけば良いかを考える。このようなアプローチには完璧な正解はなく、教師自身が考え続けることが大事であると強調されました。

スケールを使って授業を考える					
	現状はどこか？今後どこを目指すか？				
	1	2	3	4	5
課題 (めあて/目標)	教師が課題を決める	ほぼ教師が課題を決める	子供に選択肢から選ばせる	子供が選択肢をつくり、選ぶ	子供が自分で課題を決める
過程	教師が意識して過程を回す	子供が過程のどこかを意識する	過程の一部を子供が回す	ほぼ子供の意思決定で過程を回す	すべて子供の意思決定で過程を回す
形態 (個別/協働)	教師が誰とどう学ぶかを決める	教師が誰とどう学ぶかをほぼ決める	過程の一部で誰とどう学ぶかを子供が決める	過程のほぼ全てで誰とどう学ぶかを子供が決める	すべての過程で誰とどう学ぶかを子供が決める
ツール	教師が何をを使うかを決める	ほぼ教師が何をを使うかを決める	子供に選択肢から選ばせる	ほぼ子供が自分でツールを決める	子供が自分でツールを決める
場所	教師が学びの場所を決める	ほぼ教師が学びの場所を決める	子供に選択肢から選ばせる	ほぼ子供が自分で学ぶ場所を決める	子供が自分で学ぶ場所を決める
ベース	全員同じベースで学ぶ	ほぼ同じベースで学ぶ	一部学びたいベースで学ぶ	子供がほぼ学びたいベースで学ぶ	子供が学びたいベースで学ぶ

(出典) 三井一希 (2025) デジタル学習基盤における学習者主体の学びと教師の足かけ、東研研究報告

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実へ向け

授業視察を通じて見えてきた共通項

- 1 情報へのアクセスと、子供同士のつながりをクラウドが支えている (前提)
- 2 課題の達成へ向け子供が選択し、自己調整をする場面がある
- 3 学びを深めるための教師の適度な介入がある
- 4 追究しがいのある課題設定がなされている (子供がこたわりなくなる課題)
(子供の日常的な発想を超えるために教師が提示することもOK。質の高い課題が考えや対話を促す)
- 5 子供の学びを支援する手立て (学習の手引、学習過程の共有など) がある

学習者の学びを支えるために、何ができるかを考える

個別最適な学びを、個別最適風の自習にしない

～ここで、再び三井先生の講演に戻ります～

現在、議論されている中央教育審議会の諮問事項に「情報活用能力の抜本的向上を図る」という言葉があります。今後も情報活用能力の育成が必要だということだと考えられます。

大事なことを抜き出し、情報を集められることはICT使用に関わらず大切であり、資料を整理・比較させる際に自分の考えや気づきもセットで書かせることも大事だと思います。

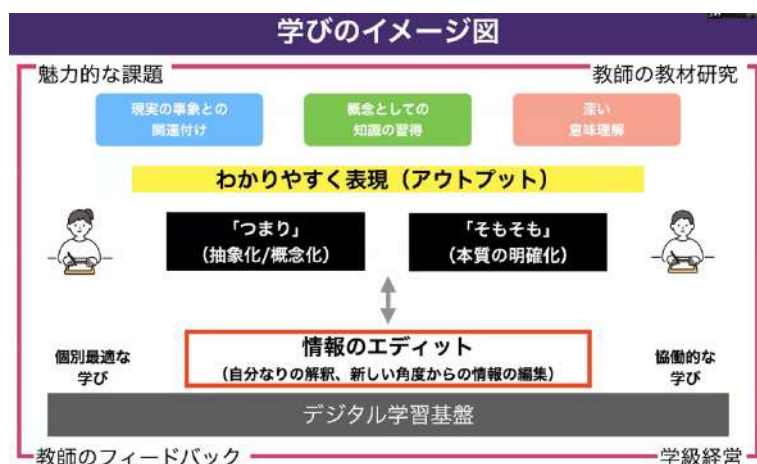
また、深い理解を促すための視点として、「つまり」と「そもそも」という考え方があります。「つまり」は情報を抽象化・概念化する視点、「そもそも」は前提に立ち戻り問い直す視点です。深い理解を促進するための視点として、これらは、新たな疑問を引き出し、物事を深く考える力を育むことができる汎用性があると思います。

情報の収集と整理だけでなく、収集した情報を「エディット」して表現する力も重要です。単なるコピーや書き写しではなく、情報を解釈し、新たな視点を加え、伝わりやすく加工する力を養うことが極めて大事だと思います。これにより、学習者は情報をより効果的に活用し、自らの学びを深めることができます。

さらにまとめ方を意識させることも大切な取り組みです。教科書の内容を書くだけでなく、内容を自分なりにまとめたり、自分の考えを書いたりすることを目指していくよう意識させていきたい。これは、ICTに限らず必要な汎用的なスキルです。

個別最適な学び・協働的な学びを進める上で、1人1台端末は「デジタル学習基盤」であり、単なるツールではなく、日常の中で当たり前に使える「環境」になっています。これから、デジタル教科書が入ってきたり、全国学力学習状況調査がコンピュータベースに変わったりして、この基盤はより厚く広がってくると考えています。その上に情報のエディット、情報に対して自分なりに解釈したり新しい角度から情報を編集したりしてみることが大事です。こういったことを個別最適な学びや協働的な学びを通じて進める時に、「つまり」「そもそも」のような考え方で情報に当たりそれを分かりやすくアウトプットすることができれば、きっと深い理解につながったり、概念としての知識の習得、そして現実の事象と関連付けたりすることに近づいていくと思います。

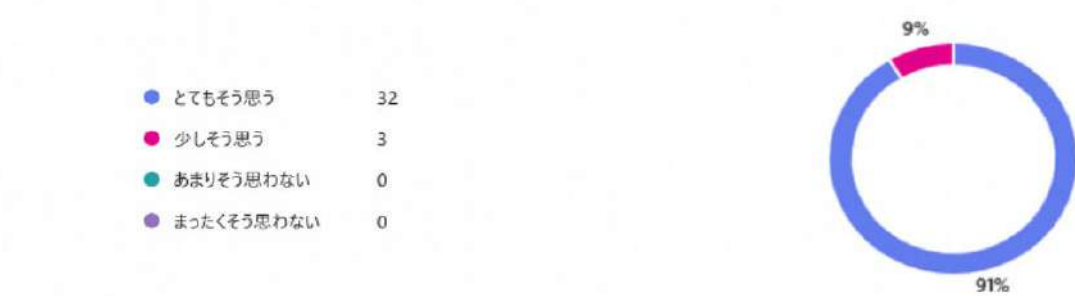
そのためには、周りを取り巻く先生方も頑張って意識し取り組んでいくことが必要だと思います。例えば、フィードバックできていなければ個別に指導する、できたらよく出来てるねなどと一緒に応じた対応が求められていると思います。協働的な学びの部分で学びを進めることの土台となっている学級経営も大事です。また、自分なりにエディットしてアウトプットしようという思いに繋がる魅力的な課題の設定も必要ではないかと思っています。そして、そういったものを支えるための教材研究も必要だと思っています。これらの取り組みがうまく回ることで、きっと子供たちが求めているところに近づいてくるのではないかと思います。



～教育現場におけるICT活用の可能性を再認識させるとともに、未来の教育の方向性を考える上で非常に示唆に富む講演でした～

<参加者からの感想（抜粋）>

本日の教育フォーラムの内容についてどのように感じられましたか。



- 「個別最適な『自習』」ではなく、「個別最適な『学習』」には大変に首肯いたします。リーディング DX の先生とお話をしたことがありますが、一致した話題として「個別最適な学習という言葉が独り歩きしている」というものでした。形式だけ真似している、前述の「個別最適な『自習』」の状態となってしまうと捉えています。「個別最適な学習」とは手段であり、目的は「子どもたち一人ひとりを大切にする」とか「子ども誰一人として取り残さない」などがあるかと思います。そしてその目標を達成するための手段の1つが「個別最適な学習」なのだろうと認識しております。だからこそ、目標を達成するために子どもたちに育まねばならない力は何かと考え、指導し、振り返りをしてまた指導する、そういったことを続けることが、我々に課せられていることなのかなと思います。私が担任するクラスも、本当に多様な子ども達がおります。そのような多様な子ども達が個別最適な学習ができるよう、本日学びましたことを活かして1つ1つ着実に力をつけていきたいと思います。本日はありがとうございました。
- 今回の教育フォーラムでは、本校の校内研究にもつながる部分があったので興味を持って聴くことができた。今回の学びの中で得た知識や実際行なった授業を参考にしていきたい。
- 令和の日本型教育に関して、指導を通して困難さを感じている部分についてたくさんお話を伺いできてよかったです。子どもたちにどのような力をどのようにつけさせるか、教材研究や学級経営を基盤としつつも、子供たちに合わせて、子供たちと作り上げていきたいと思っています。ありがとうございました。
- 実践の内容がよく分かりました。ありがとうございました。学校全体で取り組むことの大切さを感じました。自校の職員にも環流したいと思います。
- テーマに対して、理論と実践の両面からアプローチした発表だったので、あっという間の2時間だった。複数の校種の実践発表を聞くことができたし、「明日からやってみよう！」と思えるような発表だった。とても有意義なお話を伺わせていただきました。ありがとうございました。
- 今学校で行われている内容を知り、それがどんな風に活用され、必要であるのかを知る機会になりました。（学校の授業参観では出来上がった姿しか見せられないので分かりにくかつ

たですから) 本質、何をを目指しているのかを知りたいと感じていました。よって、知ることができ良かったです。今後関心を持って参りたいです。

- 全員が共有できる良さと共有できてしまうことによる使えなさのある子がいるのではと感じます。そのときの具体策があれば知りたいと思いました。特別支援学校では、遠隔授業や視線導入を活用しています。そのような実践をもっと知りたいです。
- 本日はありがとうございました。三井先生の話が、非常に分かり易く、納得できることが多々ありました。前半にお話いただいたお二人の時間が短く、もっと深いところまで聞きたかったです。
- 個別最適な学習をすすめるために、教師が教えるという考えかたから、見通しを持った中で、たくさんの学びの中から自分に合った学習法を選択させていく必要性を改めて感じました。私自身も、まずはやってみる、そこからスタートしていきたいです。
- 具体的実践発表、三井先生のまとめのお話…と構成がよく、大変参考になった。最後に三井先生が提出された学びのイメージ図が大変わかりやすい。
- これからの学習には、ICT は不可欠であり、デジタルカリアルかが問題ではなく、デジタルを活用してリアルを学ぶ授業をつくっていくことが大切であると感じました。デジタル学習基盤が整えば整うほど、教師の出番、教師の介入が大切になってきます。あらためてそこに気づかせてもらった今日のフォーラムでした。
- 荻原先生が学校全体で、できるところから取り組まれているところに大変感銘を受けました！また、教師はより一層一人一人を見る力が求められるなあ！と感じました。
- 具体的な実践事例等があり、参考になった。成果やメリットだけでなく、悩んだ点やうまくいかなかった点についても触れていただいたことで、今後取り組んでいく際の参考になった。
- 日頃の授業実践で個別最適な学び、協働的な学びを仕組んでいくにあたり、魅力的な課題設定をしていきたいと思った。また、情報収集→整理分析の段階において、何を整理させるのか、つまり、そもそもという視点を大切にしていこうと思った。
- 他校の先生方の取り組みを知る良い機会となりました。また、新しい教育観や授業観についても、納得しました。ただ、ICT の活用方法については資料や映像を見るだけではなかなか自分で実践するにはハードルが高く、実際に具体物を見て、作成方法を教えていただかないと、授業に取り入れるまでに至らないなという印象を受けました。
- 直接参加したので、講師に質問ができたのでよかったです。オンラインの方の中には質問したかった方もいらっしゃるのでは？と思いました。両校ともに職場での情報共有や切磋琢磨する環境、質問しやすい環境、データの共有があることが、素晴らしい実績へとつながっていることを改めて学びました。管下の学校に伝えていきたいです。貴重な学びをありがとうございました。3月も楽しみにしております。

■令和6年度「前期実習前教師力養成講座」の報告

1 実施日 令和7年2月3日（月）Ⅲ～Ⅳ限 13：10～16：20

2 開催場所 山梨大学教育学部（甲府西キャンパス）

①講演会場 J号館 特別会議室、②相談会室 LC-12、13、14

3 次第

(1) 開会行事 長谷川センター長挨拶

(2) 第1部 田中一弘先生ご講演

(3) 第2部 渡井 渡先生ご講演

(4) リフレクション

(5) 閉会行事 支援課からのお知らせ、アンケート記入依頼等

(6) 希望者による相談会

○相談員：客員教授 2名（樋口、三井）

教育実践総合センター 准教授（臨床心理士有資格者） 1名（渡部）

2月3日（月）、山梨大学教師塾プログラム事業の一環として、「前期実習前教師力養成講座」を開催した。

本講座は、主に初めて実習に臨む2年次生を対象に、実習前の不安や疑問を取り除き、前向きに取り組む意欲を喚起するという目的の下、学校という職場のよさや教師としての仕事の魅力、効果的な授業づくりの方法等について、現場経験豊かな講師による講義、客員教授による相談会を中心とした前期実習準備講座として行った。今年度は、対面形式で行い、117名が受講した。

第1部は、山梨県総合教育センター相談支援センター長の田中一弘先生を講師として招聘し、「道徳科の授業 むずかしさと 大切さと おもしろさと」と題してご講演いただいた。田中先生が実践された、具体的な例を元に、答えがひとつではない道徳的課題に対し、児童生徒が自分自身の問題と捉え『考え・議論する』ために必要なことはどのようなことなのか、わかりやすくご講義いただいた。

第2部は、市川三郷町教育長の渡井渡先生を講師として招聘し、「今日の学校教育の課題～教員を目指している皆さんへのエール～」と題した講演を拝聴した。いじめや不登校など課題山積の教育現場にあって、児童・生徒理解に基づく専門知識や指導技術、人間性等の重要性について、ご自身が経験した際のエピソードも交えながらわかりやすくお話しいただいた。

講演後に、客員教授の先生方にもご指導いただきながら、グループ別にリフレクションを行い、感想等を交流した。その後、希望者に対して個別の相談会も開催した。

受講後のアンケートには、多くの前向きな意見が寄せられ、充実した学びであったことがうかがえた。

4 受講者数 117 名

5 成果と課題

(1) 成果

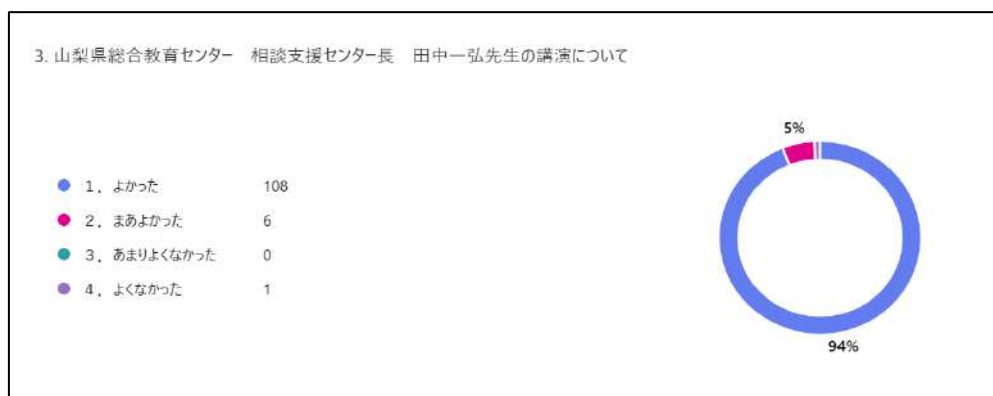
【アンケート結果から】

○第一部・第二部とも「よかった」がほとんどであり、「まあよかった」との合計は99%を超える高い評価結果となった。また、その理由からも目的である「実習前の不安や疑問を取り除き、前向きに取り組む意欲を喚起する」ことに関する記述が多くあり、本講座の開催意義を感じる。※アンケートの記述詳細は最後に掲載

○リフレクションにおいては講義内容についての感想やそれぞれの意見の交流を行った。講義を通じて、得た知識や考え方を前向きに活用しようとする記述が見られ、よい振り返りになったことが示唆された。また、教育実習に関しての不安や疑問を、自分以外の多くの人も感じていたという記述が多かった。このことが、安心感と、共に乗り越えていこうという意欲喚起につながることを期待したい。

○希望者による相談会については、小人数であったが、長時間の相談になった会場もあった。相談する学生にとってはとても重要な場であると考えられる。

(第一部 道徳科の授業の講義)



○問3の回答の理由

(「実習前の不安や疑問を取り除き、前向きに取り組む意欲を喚起する」に関する記述の抜粋)

* 答えを一つと断定するのではなく、子どもたちからの多種多様な答えがどれも正解であることがわかった。教え込むのではなく気づかせる授業をつくっていきたいと感じることができた。

- * 道徳の授業に関して答えが一つであることを指導するのではなく、考える、議論する道徳として指導していくことが大切だということを学べたから。
- * 道徳科の授業から児童生徒から学べること、教師がどうあるべきかを改めて考えることができたからです。
- * 教科の中で、道徳だけあまり授業のイメージをつかめないままでいたため、授業作りの指針をいただけたと感じている。授業のまとめ方に関してもそれぞれが多様な考えを持っていることを肯定できるようなものが良いと知れたため、良かった。
- * 道徳の授業は教育実習で行う授業の一つであるけれど、講義だけでは把握できないこともあったため、詳しい内容や意義について知ることができて良かったです。
- * 道徳の教科を教えるのはなかなか大変そうだと思っていたが、児童生徒にどういうことを学んでほしいか目標を決めることで少しは授業計画を立てやすくなったと思ったから。
- * 道徳教育について、どのように授業を進めていけばいいのか分からず不安だったが、生徒の意見や気付きを大事にできる授業を設計することが重要であるということを学べたから。
- * 道徳では教員が求めている言葉や結果になりがちだが、子供一人一人考えや意見が違うことを理解した上で、こちらの意見を強要しないことが大切だと分かった。また、意見交流など行うことに意義があるものが多いため、自分の中でも考えて行っていきたいと感じた。
- * 道徳の授業について、どのようにすれば良いのか全く想像がつかなかったので、今回の講義を通してなんとなく想像ができました。
- * 道徳科教育は、授業づくりや指導案作成が難しいと聞いていたし、思っていたが、田中先生のお話を聞いて答えを一つに絞る必要はなく、子どもたちと対話をしていく上で授業を完成させていけば良いと知った。
- * 道徳教育ではどうしても教師側がひとつの価値観にまとめてしまいがちだと感じていたため、今回の講義を受けて子ども自身が対話を通して自分の中の納得解を見つけることが大切だと学ぶことができ、非常に勉強になったから。
- * 道徳の授業の方法について、正直自分でもよくわかっていなかった部分があったので、とても勉強になりました。道徳では正解が一つに決まらず、しかし道徳の教科としてのねらいや目標はあって、そこをどのように教員がはたらきかけていくのか。どうしても単純に答えが決まっているような発問になってしまう部分について、どうしていけば良いのかを知ることができました。特に、子ども一人一人の納得解を見つけることを目的とすること、教員自身が児童生徒からどんな答えが出てくるか気になる質問をすることを、意識したいと思いました。
- * 子どもが自分のこととして道徳的課題を考え、議論して人と関わり、納得解を出すことが大切だと学んだことで、道徳の授業を価値注入の授業にしないための手立てを理解できた点。

* 道徳といった教えるのが難しい教科の、指導する上での考え方などを学ぶことが出来たため。

* 道徳教育において、教師がどのような働きかけをすべきか学べる良い機会だったから。

(第2部 学校教育の課題に対する講義)



○問5の回答の理由

(「実習前の不安や疑問を取り除き、前向きに取り組む意欲を喚起する」に関する記述の抜粋)

* 教師の専門性という視点の話を聞いて、子供たちに自分で気づかせるような発問や授業作りをしていかなければならないと学べたから。

* ベテランの先生でもたくさん失敗することがあるので失敗から学んで子どもたちの笑顔のために熱心になれる教員になりたいと感じた。

* いじめや不登校の子に対する対応は自分の価値観で行なってしまうことがあると思うので、どのように接したら良いか知ることができたから。

* 失敗談を交えてくれたおかげで、具体的にどうすれば良いのか考えることができた。

* 現場のリアルをより鮮明に知ることができ、将来の見通しを知れた。

* 教員としてのあり方を改めて考え直すことができた。

* 理想論だけでなく、失敗談もきけて、また教員に必要な力を知ることができた。

* 自分の考えを改めるきっかけになったから。

* 児童生徒のことを理解するためには、まず「観察」することが重要であることを知った。
また、失敗しながら教師自身も学ぶことができるようになりたいと思った。

* 教職の専門性ということで、先生だからできることはなにかを考える機会があって良かった。

* 目立つ児童生徒だけでなく、優秀やおとなしい子どもたちにも目を向けることを失敗談から学べたので教育実習や教員生活で注意していきたい。

* ベテランの先生でも失敗をたくさん経験して、そこから多くのことを学んでいると知っ

て、自分もたくさん実践に移していきたいと思ったから。

- *教職の難しさとやりがいについて改めて感じられるような授業だった。
- *子どもに自分で考えるきっかけを与えるための一言など、教師の一言が大切であることを実感できたため。
- *児童生徒の様子を誰よりも知っているためには、日々の観察が大切になるのだなと改めて感じた。
- *子供のための指導を大切にしている、自分自身が目指していかななくてはいけない姿について再確認できた。

○リフレクションで印象に残っていること

(「実習前の不安や疑問を取り除き、前向きに取り組む意欲を喚起する」に関する記述の抜粋)

- *教師の立場は、子供にとって私たちが思っている以上に重いこと。子供の視点を忘れかけてることに気付かされた。
- *いじめなどの教育課題に対して 1 人で抱え込むのではなく、学校全体の問題として教員全体で考えることが大切だということがわかった。
- *多様性を認めること、観察することが必要であるという意見が多かったこと。
- *みんな不安に思っていることも理想としていることも一致していることが多かった。
- *教員は思ってるより悪くない仕事だという事。
- *私たちが教師になった際に大切なこととして、報告連絡相談が重要であり、チーム学校を大切にしていくこと。
- *お互いに意見交流ができ、様々視点から教育を見直すことが出来た。
- *教師の言動を子どもはよく見ているなと思った。一言一言に責任を持っていきたい。
- *教師になることに不安を抱くこともあるが、チームで教育していくという言葉が印象に残った。
- *皆さんの考え方が講義によって変化していくことをリフレクションを通して前向きな方向に変化していくことを感じたこと。
- *グループ内で話した今日の内容だけでなく、将来への不安や考えを知ることができ、自身の考えを更に深めたいと感じた。
- *みんなそれぞれ不安があるけど高い志を持って教師を目指しているのだと思った。
- *教育はそんなに簡単なものではないが、とても魅力的で素敵な仕事であること。
- *教職の専門性などの多用しがちな言葉の意味を自分で言語化できるまでに理解することと、それを持って子どもたちを導いていくことができるようにしていかなければならないという自覚が大切だと思った。
- *教育実習などで現場に出る際に、必要な支援(伴走者としての働き)姿勢や意識など考えることができた。
- *実習の不安が消えた。

- * みんなで話したことで教育実習の不安や教員に対しての考え方をありのままに話すことができて知見が広がった。
- * 今日学んだことを踏まえて実際に実習に自分が行く時に不安な気持ちをもったという率直な意見を話し合えたことが印象に残った。
- * 教育実習について不安もあるが、児童生徒に向き合ってたただ一方的に指導するだけでなく、主体的に考えさせて学びを深めさせられる先生になることを心がけていきたいという話が印象に残った。先生として子どもと接することはどうしても不安ではあるが、不安なりに子どもたちのことを中心に考えて実習やその後の教員生活を送れたらいいなと感じた。
- * 児童のことを理解する、学校が嫌いでも、自分が好きと感じさせてあげられる教師になりたいと思った。
- * どのような教員になる必要があるのか、それぞれの意見を聞いたこと。
- * みんな教員になることに不安を感じていて、自分もいろいろと不安だけど、失敗しながらでいいから頑張ろうって気持ちを高め合えてよかった。

(2) 課題

○今年度も、対面形式の計画・運営であった。講師の熱意が伝わりやすく、受講生同士のコミュニケーションもとやすいため、この形式が望ましいと考える。昨年度の課題であった、「講義室」型の教室ではグループワークがしにくいという反省点から、今年度より「会議室」を使用するよう変更した。「グループでの話し合い」や「リフレクション」への移行は大変スムーズであった。しかし、今年度は話し合い活動において、最初のグループ討議がなかなか進まず、講師の先生にアイスブレイクを行っていただくことになった。様々な意見に触れることを重視していたため、ここ数年あえてグループメンバーを「コース・系」で構成せず、ランダムにグルーピングを行っていたが一考の余地がある。グルーピングについては、どのような方法をとっても一長一短あるが、短時間での円滑なグループワークを考えると、来年度は、第1部の講師にアイスブレイクを前もってお願いしておくか、「コース・系」でのグループづくりや、「校種別」のグループづくりを行い、話し合いや、質問・相談がしやすい形を考えることも視野に入れて企画することも必要である。

参加者のアンケート全記述（回答 117 名）

○第一部 道徳科の授業の講義 評価の理由

- * つかみか面白くてリラックスして聞ける講演だったから。
- * 道徳の授業の在り方について深く考えることができたから。
- * 今まであまり考えてこなかった道徳の授業に関する話が聞けてよかったから。

- * 道德の話詳しく聞けて良かった。
- * 面白くてわかりやすい講演だった。道德の授業と言われて自分が経験した道德の授業はあまり覚えていなかった。なので子どもに考えさせることでより記憶に残り質の良い道德の授業ができると学んだ。
- * すごい聞きやすかった。話術で圧倒された。
- * 道德教育について、子供たちに押し付けない教育をわかりやすく講義してくれた。
- * 道德の大切さを改めて実感した
- * 考えるのが難しい道德教育について自己完結が危ういということがわかった。答えがひとつでは無いからこそ子ども同士に合流してもらって色々な意見があることをしり、意見の違いからどんな考えがあるのかを理解することが出来るということがわかった。考えると同時に議論することが出来る道德の授業にしたいと思ったから。
- * 道德の授業の基本的な考え方を学べた。
- * 答えが一つと断定するのではなく、子どもたちからの多種多様な答えがどれも正解であることがわかった。教え込むのではなく気づかせる授業をつくっていきたいと感ずることができた。
- * 道德の授業に関して答えが一つであることを指導するのではなく、考える、議論する道德として指導していくことが大切だということを学べたから。
- * 道德科の授業から児童生徒から学べること、教師がどうあるべきかを改めて考えることができたからです。
- * 道德の授業の理想というか、教師の発問を踏まえ、授業を作っていけばいいのか理解できたから。
- * 教育実習に活かせる内容が多かった。子どもの目線に立つ時間が多かった。
- * 現状の先生の考えが学べた。
- * 道德について理解できた。
- * 道德教育はどのように行ったら良いかわからない人が多いと思うので、わかりやすく面白い説明だったから。
- * 道德で意見を発表する理由など、考えてなかったことなどを考える機会になったため。
- * 道德教育への理解が深まったから。
- * 道德について学べた。
- * 道德の授業を中心に意義を考えることができたから。
- * ネタも入っていて聞いていて面白かった。
- * 道德教育に焦点を当てて考えることがあまりなかったから。
- * 改めて考えることができた。
- * 子供達が考えて、ディスカッションを行う大切さを理解できた。
- * 最初のアイスブレイクが面白くて自分もこういう掴みを持ちたいと強く思ったから。
- * 道德の授業について詳しく知ることができたから。
- * 答えをまとめなくて良いという内容が印象的だったから。
- * 楽しく聞くことができたし、話がずっと入ってきたから。
- * 道德というまとめが難しい教科を行う上で大切なことを聞きやすく説明してくださったから。

- * 道德の必要性に気づけたから。
- * 道德の授業をどう捉えていくのかや何を大切にしていけるかを学ぶことができたから。
- * 話が面白くて、内容が入ってきやすかった。道德教育の大事さを知ることができた。
- * まず、はじめの自己紹介が面白かった。話し合いの大切さも改めて感じたから。
- * 教育に必要な力の意味をより深く知ることができた気がする。
- * ICT の使い方として「発言のハードルを下げる」のようなニュアンスのことが印象に残った。
- * 自分にはなかった考えを知ることができたから。
- * 道德の在り方と併せて、教員としてどうしていくべきかがわかった。
- * 認識や考え方などについて考えることができたから。
- * 道德教育的課題には答えがひとつでは無い問いがあり、それを交流することが大事だとわかったから。
- * 教科の中で道德だけあまり授業のイメージをつかめないままだったため、授業作りの指針をいただけたと感じている。授業のまとめ方に関してもそれぞれが多様な考えを持っていることを肯定できるようなものが良いと知れたため、良かった。
- * 道德教育についてよく理解出来たから。
- * 改めて道德について考えさせられたから。
- * 子どもに考えてもらうことは「これをやりなさい」と指導するよりも大切だと思えたから。
- * 教員になる上での必要な要素がしっかりわかった。もう少し、道德のいろんな視点で見ることの踏み込んだ理由も聞きたかった。
- * 内容もさることながら、話の展開がとても惹かれるものだったから。
- * 道德において自分らしさを出せるような授業をすることの大切さを学べた。
- * 具体的で分かりやすかった。
- * 道德という教科は難しいイメージがあったが、子供達の考え方一人一人が違って面白いということを知ることができた。
- * 道德の授業で何に重きを置けばよいか理解することができたから。
- * いままで道德の授業について深く考えて来なかったが、まとめを教師がするのではなく、子供一人一人がまとめるということを学べたから。
- * 道德といった教えるのが難しい教科の指導する上での考え方などを学ぶことが出来たため。
- * 道德教育において、教師がどのような働きかけをすべきか学べる良い機会だったから。
- * 道德の価値については色々な考え方があると思うので、グループメンバーとの議論の時間があったのが良かった。
- * 道德についてどのように授業をつくっていくべきか学ぶことができたのでよかった。
- * 意見交換することの意義を改めて考えることが出来た。
- * 学校にくる理由のひとつが人と関わり異なる考え方を知ることなのかなと思った。
- * 教員として、個の尊重や考える力を与えるという大切なことを教わった。
- * 「人と関わらないと学べないことがある」という言葉がとても刺さった。学校がある意味、学校に行く意義をもう一度自分の中で解釈し直すことができた。

- * 簡単な理由ですが、聞きやすいプレゼン内容であったため。
- * 道徳の授業は教育実習で行う授業の一つであるけれど、講義だけでは把握できないこともあった。
- * 詳しい内容や意義について知れて良かったです。
- * 話がとても興味深かった。また、先生の人間性が出ていて聞いていて飽きなかった。
- * 道徳の教え方など詳しく理解することができたから。
- * 与える教育ではなく、考えさせ、子どもたちの中で発展させる形の教育が大切だと思えたから。
- * 道徳を学ぶ意義について考えることができた。また、意見交流の意義を考えることができた。
- * 道徳の授業において非常に大切なことを分かりやすく教えてくださったため。
- * 道徳の教科を教えるのはなかなか大変そうだと思っていたが児童生徒にどういうことを学んでほしいか、目標を決めることで少しは授業計画を立てやすくなったと思ったから。
- * これまでの話の中で実体験のある話はあまり聞いたことがなかったので、すごくためになった。
- * 道徳の授業の展開などが知ることができた。
- * 道徳教育について、どのように授業を進めていけばいいのか分からず不安だったが、生徒の意見や気持ちを大事にできる授業を設計することが重要であるということを学べたから。
- * 自己紹介から掴みを大切にしていた。真似していきたいと思った。
- * 今まで考えていた道徳の授業の認識を変えてくれるような講義で、とてもためになったと感じたため。
- * 道徳教育について、学校教育のなかで自分も軽視してしまっている部分があったが、やはり答えのない問いについて考え、言語化し、話し合うことは重要であり、その活動のための教師としての心構えを学ぶことができた。
- * 道徳という科目の視点から子どもたちの理解を学んだことで、改めてどう接していけば良いかを理解できたから。
- * 道徳では教員が求めている言葉や結果になりがちだが、子供一人一人考えや意見が違うことを理解した上で、こちらの意見を強要しないことが大切だと分かった。また、意見交流など行うことに意義があるものが多いため、自分の中でも考えて行っていきたいと感じた。
- * 道徳の授業は、答えを一つにするのではなく、自分の納得解を見つけるという考え方は、授業を作る上で大切な考え方だと思ったから。
- * 道徳の授業について、どのようにすれば良いのか全く想像がつかなかったのが、今回の講義を通してなんとなく想像ができました。
- * 話がとても分かりやすく、自分が教員になるとしたら絶対にぶつかるであろう壁だと感じたから。
- * 「答えがひとつではない」ということがもっとも印象に残り、「友達ともしっかり仲良くなるために…」の意見交換で、グループの一人一人の意見が全く違ったため、答えはひとつではないということをその場で実感することが出来たため。
- * 道徳において、ただひとつの考えに行き着くようにしたり、無理にまとめようとしていたりするのではなく、児童一人ひとりが自分で納得できる答えと出会えるようにするということが大切だということが特に印象に残り、とても勉強になったため。
- * 意見の交流という教育現場では当たり前にあることで自分でも実習では行おうと思っていたことを行

う。

* 理由などをもう一度考えるきっかけになった。

* 道徳科教育は授業づくりや指導案作成が難しいと聞いていたし、思っていたが田中先生のお話を聞いて、答えを一つに絞る必要はなく子どもたちと対話をしていく上で授業を完成させていけば良いと知った。

* 道徳教育の新たな視点を見いだせたため。

* 自分の中で一番不鮮明な教科だった道徳の意義などを知ることができたから。

* 道徳的課題は、答えが一つではないという言葉が印象に残り、私が専門とする国語の授業でも正解を一つに定めることはしてはいけないと考えることができたから。

* 道徳に関しての指導法がわかった。

* 道徳という難しい教科について、知ることができたから。また、意見の交流など普段やるべきだと考えている活動の意義を改めて考察する必要があると感じたため。

* 自己紹介が面白かったから。また、道徳教育では、教員が一つの価値を教え込むのではなく、子どもが話し合いなどを通じて自分の納得のいく解答に気づいていけるような授業が大切だということを学び、勉強になったから。

* 道徳の授業に限らず、自分で考えることの必要性や答えが一つではないことを知る重要性を理解できたから。

* 道徳という教科から子どもに考えさせることの重要性を確認できたから。

* 道徳の授業で子どもたちに何を学ばせるか、どう学ばせるか考えることができたから。

* 道徳科について考えることができた。特に意見交流の意義について考えたことで今まで考えてこなかった活動の意義について考えることでより良い活動を作っていけると思った。

* 今まで道徳科の授業に難しさを感じていたので、実際に授業をするときにどうしたら良いのか困っていたが、道徳的課題は答えが1つではないからこそ子どもたちとの関わりを通して話し合いを深めることができるなということを知れたため。

* 道徳教育ではどうしても教師側がひとつの価値観にまとめてしまいがちだと感じていたため、今回の講義を受けて子ども自身が対話を通して自分の中の納得解を見つけることが大切だと学ぶことができ、非常に勉強になったから。

* 道徳の授業は答えがないと言うことに加え教師の指導次第で子どもの学びも変えることができることを学べたため。

* 短いスパンごとにはリフレクションを入れ、集中力を保ちながら話を聞くことができた。内容面では実際の体験されたことから上辺だけでなく、教師としてどのような指導力、教え方、気づかせ方が求められているのかを学ばせていただいた。

* 道徳の意見合流をすることがなぜ必要なのかを改めて知ることができたのでよかった。

* 道徳の授業の方法について正直自分でもよくわかっていなかった部分があったのでとても勉強になりました。道徳では正解が一つに決まらず、しかし道徳の教科としてのねらいや目標はあってそこをどのように教員がはたらきかけていくのか、どうしても単純で答えが決まっているような発問になってしま

う部分をどうしていけば良いのか知ることができました。特に、子ども一人一人の納得解を見つけることを目的とすること、教員自身が児童生徒からどんな答えが出てくるか気になる質問をすることを意識したいと思いました。

*個人の尊重が重視されてきているのは良いことだし、自分もそれを教員になってからも意識しようと思っていたけれど、その意識に隠れて実は人との関わりが減っていることに気づけた。

*まず、自己紹介のつかみで心をガシッと掴まれました。道徳教育については考えることが難しいと思っていましたが、答えがひとつである必要は無いという部分ですごく納得したため、1の評価をしました。

*答えが一つではない教科における話し合いの重要性に気づけた。

*みんなの雰囲気をリラックスさせるスタートだった上に、道徳の大切な部分を改めて学ぶことが出来たから。

*学校教育の中で、今の時代個人でも勉強ができる状態になっていたり学習塾などがたくさん出てきたりしている中で、改めて学校での勉強の必要性について考えられました。

*最初のつかみも面白かったし難しい道徳についてしっかり考えることができた。具体的でためになった。

*子どもが自分のこととして道徳的課題を考え、議論して人と関わり、納得解を出すことが大切だと学んだことで、道徳の授業を価値注入の授業にしないための手立てを理解できた点。

*人との関わりが少なくなっている現状が人に与える影響は大きく、個の尊重が大切とされている一方で、自分と異なる考えを受け入れようとせず批判する傾向にある。人と関わって共に生きていくためには、受容が大切なのではないかと考えた。

*とてもためになる話だった。

*道徳について知らなかった角度から聞けたから。

*最初の車が好きという話からエピソードトークで車の話をいれて最後にハンドルにもアクセルにもブレーキにもなるというまとめで車の話で一貫していたのが面白かった。

*答えが一つでないこと、自分で考えることの重要性を学べた。また、道徳的判断力、心情、実践意欲と言うように分けることでより詳細な分析ができると思いました。

*道徳の授業において何を児童・生徒に身につけさせたいのか、道徳の授業をどのように行えば良いのか理解することができたため。

*道徳の重要性について知れた。

○第2部 学校教育の課題に対する講義 評価の理由

*かなり現実的な内容で実際に現場で働いた人からしか聞けない内容を話してくれたから。

*教師の存在意義やいじめ、不登校への対応方法について学べたから。

*教師の専門性という視点の話を聞いて、子供たちに自分で気づかせるような発問や授業作りをしていかなければならないと学べたから。

*いじめや不登校ついでの話聞くことができて良かった。

*ベテランの先生でもたくさん失敗することがあるので失敗から学んで子どもたちの笑顔のために熱心

になれる教員になりたいと感じた。

* 自分の教育観が揺らいだ。数日間余韻に浸れる会だった。

* 教職の専門性と、今日の学校教育の課題について教師の関わり方をわかりやすく講義してくれた。

* 児童理解の大切さや教員の良さを考える時間になった。

* いじめの捉え方が人それぞれすぎるのがわかった。いじめの指導にも工夫があって、ほんとにだめな事だと理解出来るには自分で気づく必要があることがわかった。学校に行きたいけど行けない不登校のこの気持ちを理解しないといけないと思った。エネルギーが溜まるような行動をとりたいと思った。不登校の子に対して、どのような対応、コミュニケーションを取れば良いのかについて深く考える機会になった。

* 児童生徒理解の大切さがわかった。

* 教職で求められるのは知識ではなく児童・生徒理解であることがよくわかった。教師から一方的に叩き込むのではなく、自ら気づかせるような対応をとることが必要だということを知ることができた。

* いじめや不登校にといった教育課題に対してどのように向き合っていけばいいか知ることができたから。

* 新任の先生でも、他の先生に負けないこと、だれよりも自分の児童生徒を理解していることにとても納得することができたからです。

* 失敗談から学び、自分は同じ失敗をしないようにして子どもたちに還元したい。

* 教育実習に役立つ内容が多かった。

* 失敗談から子どもへの接し方を学べた。

* 児童理解が大切だと分かった。生徒に寄り添っていききたい。

* いじめや不登校の子に対する対応は自分の価値観で行なってしまうことがあると思うので、どのように接したら良いか知ることができたから。

* 失敗談を交えてくれたおかげで、具体的にどうすれば良いのか考えることができた。

* 子供達と接していく上で大切なことがわかったから。

* 生徒との関わり方について考えさせられた。

* 子どもの観察の大切さを学ぶことが出来たから。

* 失敗談がとてもためになった。

* 不登校について、自分なりの答えを見つけて奮闘している姿がカッコよかった。

* 児童生徒と向き合っていきたいと思った。

* 教員としてのあり方を改めて考え直すことができた。

* 現場のリアルをより鮮明に知ることができ、将来の見通しを知れた。

* 教員になる上で大切なことを学ぶことができたから。

* 児童生徒に対しての対応方法の心構えを聞いたから。

* 講義の内容がとても良かったから。

* 不登校やいじめ問題をもっと前向きに捉えるようにする為に大切なことを教えてくださったから。

* 先生たちが経験した実際の例を知ることができたのが本当によかったと思う。

- * 子供たちに対する接し方を理解できたから。
- * いじめの問題や不登校についての対応の失敗談が聞けてとても参考になったから。
- * 理想論だけでなく、失敗談もきけて、また教員に必要な力を知ることができた。
- * 失敗談を聞くことができ、そこから学ぶことがあったから。
- * 最初の入りで心を掴まれました。教育の現場からどういった教育をすべきかわかった。
- * 登校ラインの話が印象に残ったから。
- * 自分の考えを改めるきっかけになったから。
- * 私も大切にしている観察という視点から、その先をどうしたらいいのか、が分かった。
- * 不登校などの支援について、体験談を踏まえて分かりやすかったから。
- * 実際にいじめや不登校の実態、不登校生徒への対応の経験など教師に必要不可欠な知識が身についたから。
- * 教科教育だけでなく、さまざまな場面で生徒に気づかせる工夫が必要であることを学べた点。
- * 児童生徒理解の大切さに気づけたから。
- * いじめ問題について、明確にどのような指導がダメなのかを理解できたため。
- * 教師の一言が子どもに影響を与えることを実感できたから。
- * 失敗談は、他人の私が聞いても学べるもので、それこそ、決めつけのない自分で考えることにつながった。
- * 実際の失敗談を聞いたことが何より良かった。次にいかせる。
- * いじめや不登校など自分が言いたくても言えない気持ちが沢山児童生徒にはあるのでその子たちに寄り添えるような関係性になれるようにしたいと思った。
- * 具体的で分かりやすかった。
- * このような講義では成功談ばかりを話されることが多いイメージだったが、失敗談を話して頂けた事でそこからの学びがあったのが良かった。
- * 渡井先生の失敗談から学ぶことがたくさんあったから。
- * つかみが面白かった。
- * 失敗談などの経験から生徒指導における大切なことや教職の専門性などを学ぶことが出来たため、いじめや不登校といった現代の教育問題に対し、教師は一方的では無く、子どもに考えさせるといった子ども主体で行うことの大切さを理解できたから。
- * 自分の価値観には無かったものだったので、自分の未熟さを知ることが出来た。
- * 求められる教員像やいじめ、不登校に対しての教師としての関わり方を学ぶことができたのでよかった。
- * 不登校やいじめについて、改めて考えることができた。また、児童・生徒理解が非常に大切であると感じた。
- * いじめへの指導の仕方が具体的に書いてある。
- * 教職の専門性ということで、先生だからできることはなにかを考える機会があって良かった。
- * 児童生徒のことを理解するためには、まず「観察」することが重要であることを知った。また、失敗し

ながら教師自身も学ぶことができるようになりたいと思った。

*ただ高尚な話をするのではなくて、失敗談を踏まえていたのは良かった。

*教員の専門性について改めて考えることができました。

*不登校のエネルギーについての図がとてもわかりやすかった。また、失敗談があったことで親近感があった。

*担任としてのあり方や責任などで考え直すことがあった。

*教師は完璧な存在ではないと改めて思ったなど加え、失敗を繰り返しながら先生も成長していくことが大切だと思えたから。

*子供の理解が必要なことが分かった。不登校支援、いじめの対応どちらも必要なことに気づいた。

*実体験を踏まえて、現代の教員が直面している問題について詳しく説明してくださったため。

*目立つ児童生徒だけでなく、優秀やおとなしい子どもたちにも目を向けることを失敗弾から学べたので教育実習や教員生活で注意していきたい。

*生徒に対しての接し方を改めて確認できた

*不登校の問題を考えたときに生徒のエネルギーをもとにして考えるということはとてもわかりやすいと感じた。

*いじめや不登校など、教師になった際にどのように対応すればいいのか不安に思っていた点について少し解決方法などを学ぶことができたから。

*子供のための指導を大切にしている、自分自身が目指していかなくてもいけない姿について再確認できた。

*渡井先生の実験の経験なども交えながら、現在の教育現場で注目されている問題について考えさせられるようなとても貴重な講義だったと感じたため。

*いじめや不登校といった自分が教員になるうえで考えなければいけない問題について、また一つ新しい知見を得ることができ、自分の礎とすることができた気分です。

*教職の専門性とはと改めて考えることで、教師の真の役割について考えることができたから。

*どちらの先生も自己紹介がとても印象に残った。また、教職の専門性など当たり前によく聞く言葉の正しい意味や自分の中の考えをしっかりとさせたいと感じた。

*ベテランの先生でも失敗をたくさん経験して、そこから多くのことを学んでいると知って、自分もたくさん実践に移していきたいと思ったから。

*失敗談を交えてお話ししてくださり、教員の厳しさや大切さを学ぶことができました。

*失敗談を交える事でベテランの先生でもそういうことはあり得るという安心感とそうならないようにする対策を理解する事ができたから。

*児童・生徒理解が大切ということがわかり、たしかに担任にしか分からないことは多くあると思った。また、児童・生徒理解のベースを知ることができた点。

*教職としての魅力を改めて考え、学ぶことが出来た。また、いじめや不登校などの将来解決すべき課題についてどう捉え、支援していくか考えるきっかけにもなったため。

*いじめや不登校といった課題について考えることができた。

- * 子どもの支援について難しいことはたくさんあるが、いちばんの目標は子どもたちの笑顔のためというお話を聞いて、私もそうなれるようになりたいと思った。
- * 不登校やいじめの捉え方が変わったから。
- * いじめや不登校など教育現場の問題に対して、教員としてどのようにかかわっていくことが必要かなど考えることができた。
- * 失敗談を交えて話していただいた点。
- * 生徒に目を向けようと思った。
- * 指示・命令型で子どもたちを育てようとする姿勢について考えることができたため。年齢や教室の環境からどうしても上下関係がしやすい学校でしっかり意識するべきだと思った。また、失敗談をお話いただき失敗を恐れずそれから学ぼうとする姿勢をもちたいと思った。
- * 児童生徒理解の大切さを、先生の実体験やスライドの例などの具体例を示してくださったことにより、より深めることができたから。
- * 教職の専門性について自分の中で理解し、言動や行動の一つに細心の注意を払う必要があることに納得することができたから。
- * 指示待ち人間のスライドにて、ちょうど今日教育ボランティアの活動にて国語で詩を書こうという授業があった。何も思い浮かばない、何を書けばいいかわからないという児童に対して時間制限もあったため、こうやって書けばいいんじゃない？と指示系の言葉をかけてしまった。自分で考える力を引き出すための私の発問力を育成したいと思った。
- * 教職の専門性とは何かという、今まで考えたことのなかったことを考えることができた。また、いじめや不登校への指導のしかた、関わり方を学べたから。
- * 教師の専門性を改めて考えることができたから。
- * 教職の専門性についていざ聞かれるとどんなことが思い当たるだろうと感じていたので、改めて考える機会を設けていただき良かった。
- * 教職の専門性について言語化することで自分自身の教職への理解が深まり、目指すべき教師像について具体的に考えることができてとても勉強になったから。
- * いじめや不登校のような課題に対する教師の向き合い方、子どもとの関わり方を学べた。
- * 失敗談というものはなかなか聞くことができず、私も両親から聞いたことしか知らないため、そこから学びをいただけた。教師が与えるのではなく、子どもにいかにつづかせるか、主体的な学びとは言われるがそれをどう与えるべきかを再考する機会となった。
- * 自己紹介のやり方や児童生徒のことをちゃんと理解して行うことが大切だと学んだ。
- * これからの変容する社会や ICT の活用に対応していくこれからの教育現場において、忘れてはならない、根強く意識してはいけない教育者の本質的な部分大切なことを学ぶことができました。
- * 不登校の話が特に印象的で、必ずしも学校にきっちり行く事だけが正解じゃないので、子ども一人一人の意思を読み取ってそれぞれに合った対応をしたいと感じた。
- * いじめや不登校というのはなかなか触れるのが難しい問題ではありますが、先生の実体験とともに話していただけたために、自分の中で具体的に将来こうしたい！とちがうイメージを持つことが出来た

ので1を選びました。

- * 自己紹介を工夫することで興味を引くことができて良いと思った。
- * 名前の話で最初から盛り上げてくださったから。教員がいる意味のようなものを教えてくださり、今まで当たり前に使っていた言葉でもよく考えてみると分からないことを知ることが出来た。
- * 教職の難しさとやりがいについて改めて感じられるような授業だった。
- * 最初名前の話をして同じような悩みを持っていても味方になれるような内容で失敗談も聞いて実生活でためになる話だった。
- * 子どもに自分で考えるきっかけを与えるための一言など、教師の一言が大切であることを実感できたため。
- * 児童生徒の様子を誰よりも知っているためには、日々の観察が大切になるのだなと改めて感じた。
- * とてもためになる話だった。
- * 失敗談も聞いたことが良かった。
- * 失敗談があったことにより自分が直面した時の対処法がわかってよかった。
- * 子どもとのかかわり方や教師の専門性について、失敗談やエピソードを交えながらの説明が分かりやすかったと思いました。
- * いじめの対応の仕方や不登校の子どもの接し方など教育現場に出た時に起こりうる問題に対して講義をしていただいてもものすごくためになったから。
- * いじめについてのメカニズムや対策について、現場の意見を踏まえた考えを知ることができた。教職の専門性についてあまり考える機会はなかったので、資料の内容だけでなく先生の体験談からも確認することが出来たため。

○リフレクションで印象に残っていること

- * 生徒との信頼があればどんなことも乗り越えていけるということ。
- * 今日の講座を通して、子ども達に考えさせることが大切だと気付くことができた。
- * いじめ問題について、実際に先生から話が聞けてよかった。
- * 教員という立場でも子どもたちと信頼関係を築くことができればあまり責任を負いすぎる必要は無いということ。
- * グループで「子どもたちの主体性」がテーマに上がり、子どもたちに考えさせられる教員になりたいという話が印象に残っている。
- * まず自己紹介がすごいと思った。聞かせる能力を高めて行きたいと思った。
- * 教師の立場は、子供にとって私たちが思っている以上に重いこと。子供の視点を忘れかけていることに気付かされた。
- * 自分の名前の自己紹介を面白くできるようにしたいと思います！
- * やっぱり先生はユーモアが大切であると思った。授業がつまらないから集中出来ないなどがあるため、小ネタをもっていると1回楽しんでから席に座ることができる時もあるよと教えてもらったので教育実習でも実践してみたいと思った。

- * 実習は楽しんだ方がいいということ
- * まとめがない授業の重要性を感じたと述べた人がいて、新たな授業スタイルが現時点で行われていることに驚いた。
- * いじめなどの教育課題に対して 1 人で抱え込むのではなく、学校全体の問題として教員全体で考えることが大切だということがわかった。
- * 内省の「気づきを得ることを目的とする」について、児童生徒にどう気づかせるかの難しさです。
- * いろいろな意見を聞いた。
- * 実際になった時に、伴奏者になれるのか、本当にできるのか不安である。
- * 教員になりたくないという学生が多かったこと。
- * 子どもに寄り添うがキーワードだった。
- * 児童理解が大切。
- * 多様性を認めること、観察することが必要であるという意見が多かったこと。
- * 不登校について、全く関わらないことも良くないし、逆に関わりすぎることも良くない中で、どのようにしていけば良いのか疑問に思っている人が多かったこと。
- * 周りの人たちは私以上に将来のことをよく考えているということ。
- * 教師の役割について考えさせられた。
- * 子どもたちの観察が大事ということ。
- * 先生も人間で完璧ではない。
- * 伴走者として教師をやっていくということ。
- * 教育実習で活かしたいことができたので、まずは自己紹介なども考えていきたいと思った。
- * みんな不安に思っていることも理想としていることも一致していることが多かった。
- * 不登校に対する少女への対応。
- * 教育実習への不安。
- * 教員は思っているより悪くない仕事だという事。
- * ほうれんそうの大切さ（報告、連絡、相談）。
- * 私たちが教師になった際に大切なこととして、報告連絡相談が重要であり、チーム学校を大切にしておくこと。
- * いじめを経験している子たちの対応はいつまでも課題とあるということ。
- * お互いに意見交流ができ、様々視点から教育を見直すことが出来た。
- * 自分の不登校の子どもやいじめの子どもに対しての理解を自分なりにしておくべきだという意見がとても印象に残りました。
- * いじめをなくしていくために子どもの「SOS」に気づくことが重要だとおもった。
- * 専門性についてで、児童生徒の理解をするために会話が大事だねという話し合いができた。
- * 自分が学校嫌いだったからこそ自分が生徒を学校好きにさせるんだ！
- * 登校ラインを下げるという話がないことに気がなった。
- * みんな不安をもっているんだなとおもった。

- * 教員についての認識や、周りの人の考え方について触れることができたから。
- * 学校がつまらなくて嫌いだったが、つまらないのを変えようと教育現場に戻ってきたという先生の話。
- * 事前準備をすることができる教科指導と比べ、生徒指導などそれができない突発的なことである。その時に生徒に気づきを与えられる言葉をどのようにかけたらいいのかに疑問が残った。
- * 不登校やいじめについての意見交流をして、個別に適切な対応を行う難しさを感じた。
- * 気づきを、教科の指導でもいじめの指導でも大事にする必要がある。
- * 教師の言動を子どもはよく見ているなと思った。一言一言に責任を持っていきたい。
- * みんなの意見をしっかり聞けてよかった。もう少し聞いても良いと思った。
- * 市川くんが言っていた、ここまで背負うのかあってコメントとそれに対するアンサーが印象に残っている。
- * 自己紹介など子どもの興味をひけるような話をする事。
- * 子どもたちと寄り添うことが重要で、その力を身につけていきたいという事。
- * 教師になることに不安を抱くこともあるが、チームで教育していくという言葉が印象に残った。
- * 小学校の教員は教科指導などやるのがたくさんあるが、その中で不登校指導など全てのことを1人でやりきることはできるのか。
- * 不登校の対応。
- * みんなそれぞれ不安があるけど高い志を持って教師を目指しているのだと思った。
- * グループ内で話した今日の内容だけで無く、将来への不安や考えを知ることができ、自身の考えを更に深めたいと感じた。
- * 先生が児童生徒に与える影響は、思いの外長く続いているということ。思ったより覚えていた。
- * できない子に対してどのようにできるように指導していくか難しいと感じた。
- * 不登校経験者、いじめ経験者がいたため話し合いを深めることが出来たことが印象に残った。
- * 不登校の体験談。理由が本人にもわからないことなど。
- * 先生になれるか不安になったという意見もあって、確かにと思った。
- * 皆さんの考え方が講義によって変化していくことをリフレクションを通して前向きな方向に変化していくことを感じたこと。
- * 答えのない間について考えることの重要性を認識しました。難しいですが、このようなことを考えられるのも教職ならではの考えた。
- * 不登校やいじめを減らすための取り組みについて。
- * 1人で抱えるのではなく、チームで対応していくという話。
- * 新任でも何年目でも同じ「先生」と呼ばれてしまうので責任を持つべきという話がありました。
- * 教育はそんなに簡単なものではないが、とても魅力的で素敵な仕事であること。
- * いじめの加害者への支援が必要だという意見が印象的だった。
- * 教育実習にて生徒のSOSに気づく能力・資質を磨こうということ。
- * 教員と子どもたちの信頼関係の大事さ！
- * 将来の考え方について。

- * 教員は責任を持つことが多く、大変だなということを思っていたが、チームとして取り組むことで責任を分散できるということで安心したが、チームになる分別の仕事が増えるため、労働時間の問題が出ると思ったこと。
- * 学校というのはどんな場面でも児童生徒がメインであるということを理解できたこと。
- * 子どもを知ろうとすることが1番大切！
- * 教育学部の皆さんや、教師、役員の皆さんの考えや話を聞くなかで自分の考えの幅も広がったため。
- * 答えだけを教えて、過程を考えさせることが大切なのではないだろうか。
- * 教職の専門性などの多用しがちな言葉の意味を自分で言語化できるまでに理解することと、それを持って子どもたちを導いていくことができるようにしていかなければならないという自覚が大切だと思った。
- * 先生がお話してくれた「児童の背景を考えて行動する。」という内容。
- * SOS を教師から見つけてあげることが、不登校やいじめなど多くの問題の改善につながると感じたので、日頃から子どもたちをよく観察していきたいと思った。
- * 子どもが自分で考えることができるような指導や授業を作る、という内容が出て、大切なことなので心に留めておきたいと思いました。
- * いじめの話。
- * 講義内容だけでなく、講義の進め方について着目している人がいて面白かった。
- * 全員が教師の職業について考え、児童生徒と向き合うことの意味や魅力について考え、共有し合えたこと。
- * 子供達と話しやすい教員になる必要があり、そのためにどのような関係構築をするべきかという話をしたことが印象に残りました。
- * 講演の内容はもちろんためになるものが多かったが、それ以外の自己紹介や雰囲気作りが2人ともとてもスムーズで面白くて参考にしたいと思った。
- * 伴走者になっていくことが必要だというのがとても印象に残った。
- * 教育実習などで現場に出る際に、必要な支援(伴走者としての働き)姿勢や意識など考えることができた。
- * 1人で抱え込まずに、チームで解決するという先生からのお話が印象的だった。
- * 実習の不安が消えた。
- * 失敗談からまなぶこと、普段多用しがちな言葉の意味をしっかりと理解した上で子どもたちに接する必要があるべきであるということ。
- * 児童生徒理解について。
- * 教師は見られているという視点が必要で、その場の思いつきで行動を起こすことは危険であるという理解。
- * 教員という職業は難しい。
- * その子を理解しきれていると思わないように、絶対知らないことがあるという意識を忘れないこと。
- * 渡井先生の講義で担任の先生はクラスの子どものことを1番観察ができるし、1番よく知っているとい

う話に対して、確かに担任だけが1番よく知っているが、周りの先生も他のクラスの状況をよく知っている必要があるだろうし、子どもたちも安心して話せる教師が必ずしも担任じゃなくてもいいのかなあと考えたことが1番印象に残った。

* みんなで話したことで教育実習の不安や教員に対しての考え方をありのままに話すことができて知見が広がった。

* 今日学んだことを踏まえて実際に実習に自分が行く時に不安な気持ちをもったという率直な意見を話し合えたことが印象に残った。

* 教師の仕事を1人で抱え込むのではなく、他の教師に助けを求めることが大事だという内容が印象に残っている。

* 子どもに目をかける際、どうしても全員を見ていても差が出てしまう。その差をなるべくなくすため、どのようにしていけばいいかの話し合いは心に残っている。

* いじめの話。

* 教員は子どもの身近な大人であり、自身の生活も意識していかなければならないこと。

* 不登校の対応をするとき、登校刺激を与えすぎるのも良くないという話になった。子どもに寄り添いつつも、無理に学校に行かせようという姿勢をやめるべきだと感じた。

* 教育実習について不安もあるが、児童生徒に向き合ってたただ一方的に指導するだけでなく、主体的に考えさせて学びを深めさせられる先生になることを心がけていきたいという話が印象に残った。先生として子どもと接することはどうしても不安ではあるが、不安なりにも子どもたちのことを中心に考えて実習やその後の教員生活を送れたらいいなと感じた。

* 児童のことを理解する、学校が嫌いでも、自分が好きと感じさせてあげられる教師になりたいと思った。

* どのような教員になる必要があるのか、それぞれの意見を聞いたこと。

* 責任が教員に求められすぎているというのはすごく共感して教員になるのも少し億劫になるのも少しわかった。

* みんな教員になることに不安を感じていて、自分もいろいろと不安だけど、失敗しながらでいいから頑張ろうって気持ちを高め合えてよかった。

* 教師が話す一言がその子どもの将来に与える影響の重さと責任感を強く感じたということ。

* 実習。

* 先生の学校での失敗談。

* 教職の専門性を考えたこと。

* 登校ラインを変えられるという意見が印象に残った。

* 子ども自身が考えることが道徳教育にもいじめや不登校問題にも重要であると思った。

* 教育実習について。

* 自分が得意だと思っていることには、他のことよりも人の意見を拾うようにした方がいいと言われたこと。

○ご意見ご要望 特になし